詩人の戦後日記

1951・2・17〈査問〉とは何だったのか

武内辰郎

オリジン出版センター

詩人の戦後日記

1951・2・17〈査問〉とは何だったのか

武内辰郎

オリジン出版センター

略　歴

もと新日本文学会中央常任委員，日音協「音楽運動」創刊，浅沼稲次郎記念碑設立会・事務局長。オリジン出版センター創立，現在にいたる。

著　書

詩集『失われた夜に』（民芸通信の会）
詩集『皮膚と対話と』（勁草書房）
連作詩集『戦後』（土曜美術社）
連作詩集『続戦後』（オリジン出版センター）
連作『原発詩集』（オリジン出版センター）
連作詩集『女ひとへのアリア』（オリジン出版センター）
共編『労働者文学　創造の現場から』（社会新報）

詩人の戦後日記

1993年12月8日　発行

著　　者　武内　辰郎

発 行 所　(株)オリジン出版センター
東京都新宿区岩戸町16　メジャー神楽坂402
電　話　(03)3260-0453
FAX　(03)3267-8697

装　　幀　ローテ・リニエ

印　　刷　K M S

落丁本・乱丁本はお取り替えします

ISBN 4-7564-0180-5

何故世に問うか

1　一九五一・二・一七〈査問〉とは何だったのか

かつて所属する組織から、スパイ視され、〈査問〉を強いられた体験と、その後の試行錯誤への追求を、僕は四十年余胸にいだきつづけ、みつめてきたのである。

一九五一年二月十七日の、徹夜の査問体験は、今にして想えば、滑稽な面をふくんでいる。それは、一夜で終ったが、そのために被査問者がどういう痛手を受け、人生の転位を余儀なくされたかというような滑稽な側面を示唆しているといえるのである。それについては、本書が、被査問者の痛苦の状況と、検察・陪審（組織）とのかねあいを開示してい

るといってよい。

一九五〇年前後、日本共産党内における〈スパイ・査問〉事件は、ひんぱんに発生していたといってよい。文学団体のフラクションとて例外ではなかったのだ。僕の査問は、当時の全学連東大細胞における〈査問・リンチ事件〉とかかわっており、東大細胞の三ヵ月におよぶ査問では、被査問者の顔がゆがむほど殴打され、複数の自殺未遂者を出したことは、周知の通りである。

一九五一年二月十七日の僕にたいする査問は、検察官窪川鶴次郎、陪審中野重治・水野明善（戦後、宮本顕治秘書）の顔ぶれだった。その日、僕は、新日本文学会書記局（新宿）から、窪川・水野に連行され、何の理由も告げられぬまま、国分寺の作家の留守宅に着いた。この査問は、当時の新日本文学会中央常任委員会内〝日共国際派〟フラクションによるものだった。当時、僕は新日文中央常任委員になったばかりであった。

窪川のいう十三ヵ条の嫌疑は、僕の徹夜の答弁によってくつがえされたが、問題は査問の可否にとどまるものではなかったのだ。僕は当時、組織分裂の最中であり、査問じたいはやむを得ぬ仕儀と受けとめていたのである。自力で撥ね返していくしかないと考えてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たのであった。

しかし夜半、一時休止のとき、壁越しに伝わってきた窪川の、他者へのささやきに戦慄させられたのだった。窪川によるスパイ容疑の根拠が、どのようなものであったか。それは、日記じたいに、語らせたい。

嫌疑の一つに、上田耕一郎宅における新年宴会への出席がマークされていたのには、苦笑させられた。安藤仁兵衛・大久保・不破ほかの席に、僕が出席していたということが、スパイ嫌疑のかなめとされていたのである。

翌五二年、中野重治氏から、新日文に日記を発表してはというさそいがあったがおことわりし、新日文を退会したのだった。また、蔵原惟人から、日記を読みたい、という申入れがあったが、おことわりした。この日記をおみせしたのは、野間宏・佐々木基一のお二人だけである。

とはいえ、僕が〈戦後日記〉を世に問う気になったのは、それだけではない。昨今、山本懸蔵の銃殺の真相が明るみに出されてくるにつれ、あるいは、杉本良吉のスターリニズムによる銃殺が振返られるという状況に触発されたゆえかも知れぬ。スパイ査問、テロル、

銃殺は決して過去の問題ではないという現実に、僕が気づかせられたからにほかならない。

ちなみにいえば、僕が〈二・一七〉の査問と、その後十年近い国内〈亡命〉、東京〈彷徨〉を通じて、何を把握したかということである。それは、芸術や文学は、いかなる制度や機構にたいしても半歩の批判の自由を留保するものであり、このことを文学機能は保証しなければならぬということかも知れぬ。人間中心の文学思想こそが、かなめといえよう。

ここで、〈二・一七〉査問にふれた二つの文学作品を抜粋紹介し、〈二・一七〉査問の意味内容が、必ずしも無視されていないということを示唆しておきたい。

2　佐々木基一著『鎮魂――阿佐谷六丁目』

「昭和二十六年の春頃から、T君の姿はさっぱりみえなくなった。〈新日本文学会〉の書記局の仕事もしなくなった。病気で休んでいるということだった。しかし、その頃か、その少し前頃だったか、奇怪な噂がわたしの耳に入ってきた。

T君はスパイだ、というのである。〈新日本文学会〉では、そのためT君を書記局か

ら追放しようとしている、という噂も伝ってきた。誰々がスパイだ、という噂を、わたしはまともに信じる気はしなかった。簡単にそんなレッテルをはって、人を誹謗することこそ共産党内の悪しき習慣だということを、すでにわたしは幾度も経験していた。党が分裂すると、ますますこうした裏付のないレッテルが横行しはじめた。（中略）

T君はあの頃そんな噂が立ったことについて、長い間沈黙を守っていた。そのうちT君は〈新日本文学会〉をやめ、野方の家を売りはらって、どこかへ引越して行った。わたしも阿佐谷を引払ったので、それから何年間か交渉が絶えた。その間、分裂した共産党の内部にも、それぞれの派のうちにさらに分裂やら、離合集散やらが起って、いわゆる六全協で、党の統一が回復されたとき、わたしはすでに党を離れていた。その間T君はずっと国際派に近い線にとどまって、出版社に勤め、党の主流派の連中からひどい圧迫と迫害を受け、またしてもスパイとののしられ、出版社を追い出されたり、また別の出版社を起して、わたしの本を出してくれたりした。このときからT君と再び接触がはじまったのであった。T君はわたしの立場に理解をもってくれ、わたしの意見にもよく共鳴してくれたことがあった。そんなふうにして、T君と接しているうちに、昭和二十

五、六年頃の、あの話していて何かもどかしい、隔靴掻痒の感じが、次第に消えていった。

そうして、わたしははじめて、T君の口から、最初にスパイの噂が立った頃の苦衷をきいたのである。実際にあの頃、スパイとして査問にかけられ、そのショックで発病したということである。事の起りは、最近安藤仁兵衛が告白的に書いた、全学連東大細胞内におけるスパイ査問、リンチ事件に関連していた。スパイとして査問された学生の一人Fの兄であるUと、T君は非常に懇意だった。Uの家にもしよっちゅう遊びに行っていた。Uは病気中で、スパイの疑いをかけられずにすんだが、そのかわりT君が疑われたのである。文学者K、M、およびKが郊外にある作家宅にT君を連行し、査問が徹夜で続けられた。眠る時間は一、二時間しか与えられなかった。しかし、いくら問いただしても、T君がスパイであるという証拠がでてこないと、Kは執拗にT君の母親の生活費の出所をただしはじめた。実は、金に困っていたKに、T君の母は金を用立てていたのであるが、その金はまだ返済されていなかった。Kは自分の借りた金のことを、逆にそんな余分の金があるのは怪しい、スパイとしての報酬だろうといって疑ったと、T君

はいい、Kのあの卑劣さは死ぬまで許せないと手を震わせた。話がそこまでくるとT君の顔は歪み、唇が震えて言葉が出てこなくなった。うっ、と喉をつまらせたかと思うと、T君の眼がうるみ、一滴二滴涙が頬を通って流れた。

スパイと断定する証拠は何もなく、やがて全学連の三人[*1]の学生と同じく、T君の嫌疑も晴れたが、T君は翌朝[*2]隣室で、KがT君の妹をパンパンだといっている言葉、またT君の母親の生活費、その出所不明の面から考えて、スパイ行為による報酬にちがいない、そして妹が蔭でおどっていると仲間にささやいている声を耳にしたのであった。」（「光と翳」134頁～140頁）

注＊1　「三人」は、「数名」である。
＊2　「翌朝」は、「深夜」と訂正したい。

3　中野重治著『甲乙丙丁』（下巻）

この作品については、小田切秀雄・西田勝編「『甲乙丙丁』モデル一覧表」（『文学的立場』一九七〇年六月）というのがある。そのなかで、「竹村」が「武内辰郎」であると記されている。また、作中に登場する「吉野」が「宮本顕治」であり、「佐藤」は「蔵原惟人」ということになる。「田村」は「中野重治」である。『甲乙丙丁』を読むには、この「モデル一覧表」が便利である。このことを前もっておことわりしておきたい。

「しかしもう一度田村には疑問がわく。

〈いったいどの程度のことを当時佐藤や吉野は知っていたのだろうか。吉野のさしがねで、古川家で竹村の査問のようなことをやった。査問というか調査というか。あのときはみんな気が立っていた。しかしあすこまで行こうとは、誰も、おれたちの方は一人も、思ってもいなかった。最後のところへ迫りあがってきて、疑問を持ってきたおれたちが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

顔を見合わして、それを押し止めることになって、おれが直接顔を出してそれを押し止めた。それは押し止められた。何があのとき行われようとしていたのだったか、当の吉野はその後にしろ知っただろうか。知って何と考えたのだったろうか。あれは、あの時、闇から闇に葬られた。それを表立てて、竹村をこれこれの件で調べた結果、確たることは何も出なかったという風にして発表することなしに事はすんでしまった。いわばそれをいいことにして、ああいうことがさまざまにあったに相違ないあの頃の全体を、吉野は適宜に見送ったのだろうか。そしてそのなごり乃至ある発展が、しまいにこのおれを連れ出して……。

ある午後の新宿駅プラットホームが田村の眼に出てきた。田村は津田を訪ねようとしてあたふたと小田急線の階段を上ったところだった。着いたばかりの電車から、どっと押し出された人間の群れがこっちへやってくる。それを縫うようにして田村が急ぐ。誰かの手提鞄なんかが田村の膝にぶつかってこすって過ぎてゆく。

「田村さん……」と呼ばれて田村は立ちどまった。小柄な竹村がそこに立っていた。竹村は真面目な顔つきで立っている。

「お、竹村君……」

懐しさのようなものが田村にふくれ上ってきた。竹村の弟があるところに勤めていて、給料のひどい低さに足をとられたこともあってちっぽけな使い込みをした。その後始末のために走りまわったことが遠い風景のようにさっとかすめて去る。竹村の母親がひどいリュウマチで、竹村のまだ小さい妹と老母——竹村の祖母——とをかかえて四苦八苦しながら詩を書いていた。その竹村チサ（武内利栄——著者）のためにあれこれ走りまわった大分前の記憶が同じようにかすめて去る。

「除名されましたね。ほっほっほっ……」

最初の瞬間それは田村にわからなかった。つぎの瞬間田村はむらっとなった。

一歩詰めよって田村は横手を見た。プラットホームと線路面との距離は見るまでもなかった。そこへさあっとはいって来る到着電車の幻影が田村の何かの行為を封じた。田村は黙ってそこの電車へはいって行った。懐しさのようなものがこみ上げてきたとは、自分を棚に上げて何という馬鹿だったろう。」（「三十五」115頁～117頁）

この抜粋は、中野の〈二・一七〉査問の臨床感覚を微妙に浮彫りにしているといってよい。とはいえ、この表出は、中野の私小説的な想像力の所産であろう。彼の原体験とことなることは、いうまでもない。しかしながら、〈二・一七〉査問が、「あすこまで行こうとは、おれたちの方は一人も、思ってもていなかった」（窪川もか――筆者）「あれはあのとき、闇から闇に葬られた。それを表立てて、竹村をこれこれの件で調べた結果、確たることは何も出なかったという風にして発表することなしに事はすんでしまった。」というのは、何とも無責任スタイルではなかろうか。

そのうえ、〈二・一七〉査問は、「吉野」に使嗾されたとして、窪川の検察官振りを擁護し、「おれが直接顔を出してそれを押し止めた」というにいたっては、中野にとってはめでたしめでたしに違いないが、二・一七の被査問者は苦笑せざるを得ない。もしそれが真実ならば、何故、当時苦しんでいた被査問者に一言告げてくれなかったのか。もとより〈吉野〉への問いと追及は、別種の視角からなさねばならないけれど。『申乙丙丁』の表出からは、「吉野」追及の具体的な手がかり、足がかりがみいだせぬ。

また、「竹村チサ」のために、あるいは、「ちっぽけな使い込みをした」竹村の弟のた

めに、「あれこれ走りまわった」というのが、僕には判りにくい。これは、中野の想像力の所産というほかはない。新日文書記局における「使い込み」は、事実である。そして、それを「あれこれ走りまわっ」て処理してくれたのは、当時の新日文書記局の菊池章一氏ではなかったのか。これについて、いうべきことはないではないが、ここではふれぬ。

4　文学は無力か

このように書きついできて、僕の胸に〈文学は無力か〉という問いが再び突きあがってくるのだ。たしかに、文学は無力かも知れぬ。一方、文学は、「闇から闇に葬られた」査問を四十年余問いつづけ、それに耐え得る側面をも保持するものである。中野におけるプロレタリア文学の、文学と政治の一元論は、右の引用にその一端をあらわにしている。僕はこのような経験に照らして、〈詩人の戦後日記〉を世に問う必然を痛感させられたのだ。

これは、僕の四十年余後の信条である。この信条は、スターリニズムやソ連邦解体という現実綜体にも対処し得る。それ故、山本懸蔵と野坂参三との関係、スターリニズムによ

る杉本良吉の銃殺という悲劇を、文学の独自な目をもって照らしだすことが可能になる。

再びいうが、芸術や文学の機能は、いかなる機構や制度にたいしても半歩の批判の自由を保持するということである。芸術や文学の機能が鋭く問われるゆえんであろう。とはいえ、僕の指摘は、長いこと身につけてきた認識の思弁に反するものではない。むしろ、独自な認識の思弁にもとづいた追求の結果として確保され、このように提示されることになったのではないか。

自然とは人間である。
人間とは自然である。

という指摘が、あらためて検証されてよいのではなかろうか。人間には、それ位のゆとりがあってよいはずだ。自然と人間とを裂くものにたいして、いいかえれば、利潤追求の資本と強権にたいして、文学機能の告発が今日ほど求められていることはないということである。このことが、本書を世に問う前提になっているといってよい。

（敬称略）

一九九三年一二月八日

武内　辰郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com